

湯浅 誠 著

理論社、2009 年

どんとこい、貧困！

評者 永野勇氣



今でこそ、この国の貧困問題は多くの人に認知されていますが、ほんの数年前までは、そもそもこの国に貧困なるものが実在していることすら否定されてきました。日本のような経済先進国においてあるのは、せいぜい格差の問題だけだとされていたのです。

この本の著者である湯浅誠さんは、長年、野宿者支援に携わってきた経験から、この国で起きている問題が決して単なる「格差」の問題ではなく「貧困」の問題であることを早くから指摘していました。それゆえに、本書は「貧困問題と真正面から向き合おう」というメッセージを強く感じさせます。

「貧困問題と向き合う」ために必要なのは何より次の二点です。それは、「貧困観の転換」と「自己責任論の打破」です。

湯浅さんは、貧困を「必要最低限の『溜め』が欠如した状態」と定義します。「溜め」とは、「個人が有する、経済的・文化的、あるいは人間関係的な資本」のことです。具体的には、お金とか、教育を自由に受けられる環境とか、友人や恋人の存在などのことです。人間が身体的にも精神的にもそれなりに充実した、いわば「普通の生活」を選択するためには、これらの「溜め」も充実していなければなりません。なぜなら、人はただ「金を稼いで食っていく」だけの生き物ではないからです。湯浅さんは、こういった「溜め」に目を向けた貧困観への転換を主張します。

次に、貧困を個人の何らかの過失の結果として捉える自己責任論を、湯浅さんは「イス取りゲーム」の喩えを使って批判します。つまり、「座れなかったのは、椅子を取ろうという頑張りや気概が足りなかったからだ」という結果主義的なもの言いに対し、「もともと椅子の数（パイ）が少ないのだから、座れない人は必ず出る」という反論です。そこから、「イスの少ない社会構造の方を変えていくべきだ」という主張が為されます。

この二つの主張から分かるのは、「人々が貧困に陥らないだけの『溜め』が充実した社会」を、他でもない私たち自身が構築しなければならないということです。「貧困と向き合う」とは、つまりはそういうことなのです。では、具体的に私たちはどうすべきなのか。湯浅さんは「活動」の重要性を訴えます。

「活動」と聞くと、私たちは「火炎瓶を持って、講堂を占拠して・・・」といったような、どこか「血生臭い」印象を抱きがちです。しかし湯浅さんは、その認識は間違っていると云います。湯浅さんは「活動」を、世の中で感じた不平・不満を、社会に対し「問いかける」ことであると定義づけます。すなわち、「『生きづらい』社会に対し文句を言い、説得する」という、誰もが行なうことのできる、その行為こそが「活動」なのです。

「溜め」のある社会の構築は、私たち自身が抱える「生きづらさ」を表明するところから始まります。つまり、生きやすい社会をつくり出す鍵は、何よりそういった私たちの「活動」にあるのです。